

第2回中間報告

(2014年12月22日～2015年3月22日)

国際ロータリー第2710地区
2014-2015年度グローバル補助金奨学生
宗盛千枝

1. 報告書提出日：2015年3月24日 第2回報告
2. 基本情報
 - ・氏名：宗盛千枝
 - ・派遣ホストクラブ及びカウンセラー：呉ロータリークラブ、神垣和典様
 - ・受入ホストクラブ及びカウンセラー：The Rotary Club of Pocklington & Market Weighton, Mr. David Hirst
 - ・教育機関、専攻分野：The University of York, Post-war Recovery Studies

ヨーク、グルでの生活について

ヨークでの学校生活も、早半年が過ぎました。11、12月は曇りの天気が多く、また16時になると日が傾いて薄暗い毎日でしたが、3月ともなると日照時間が長くなり気温も高くなってきたのを感じます。天候に気分を左右されることなく淡々と勉学に励もう！と意気込んで渡英した私ですが、やはり晴れ間が続くと気分がよいものです。

短期集中的なコースを履修しているため。渡英した直後はヨーク市内を観光することはあまりありませんでした。しかしこの時期になると、同じフラットに住む友人たちと外食したり、ロンドンの就職セミナーに出かけたりする余裕も出てきました。特に、フラットメイトとの交流は、心の支えになっています。一月に一度のペースで課される課題に取り組む際、一人きりで部屋に閉じこもって行う作業はなかなか孤独ですが、フラットメイトたちと互いに励まし合いながら過ごしています。

また、3月12日からワークプレイスメントのために滞在しているウガンダはグル（19日に首都カンパラから移動）での生活についてもご紹介します。グル県は首都のカンパラの北約330kmに位置する県で、カンパラからは長距離バスが運行しています。グルを含むより広範囲な地域を「アチョリ地域」と呼び、ここに住む人々はアチョリ語を話します。今の時期は、ちょうど乾季から雨季へと気候が移り変わる時期で、一日に何度か雨が降ったり止んだりしています。雨季はおよそ4～7月、乾季は8～3月で、より乾燥するのは1～3月です。1980年代から2000年代までの20年にわたる政府軍と神の抵抗軍（LRA）と呼ばれる反政府勢力との武力闘争の舞台となりました。

学業面での成果

私が履修している戦後復興学コースは2月末にすべての授業を終え、3月上旬に課題を提出し、順次ワークプレイスメントへ出発しました。ワークプレイスメントとは、戦後復興学コースでは必修とされている課外活動で、いわばインターンシップのようなものです。期間は6～8週間で、戦後の地域で将来の進路や修士論文のテーマに関連した活動を行っている団体の元で、実際の業務にあたります。これまで机上で学んだ知識を生かして現場で働く経験を積むだけでなく、様々な団体にコンタクトをとり、出



願し、オファーを得るところまで自力で達成することが求められます。私は幸運にも、第一かつ唯一の志望機関からオファーを得ることができました。3月11日にマンチェスター空港を出発し、12日にウガンダのエンテベ空港に到着、翌13日にRefugee Law Project (School of Law, Makerere University)でのワークプレイスメントが始まりました。

Refugee Law Projectは1990年にウガンダはマケレレ大学法学部の一組織として設立されました。設立された当初は難民や政治的亡命者に対して法的・社会心理的



(ヨークの寮から見た朝焼け)



な支援を行ってきましたが、ここ12年で支援対象者を大きく広げ、現在は国内避難民や国外追放者も対象に、様々な支援を行っています。私はこの中でも特に、戦時に性的暴力を受けた男性に対する支援に関して強い興味を持ち、志願しました。男性に対する性暴力に関して活動を行っている団体は非常にまれで、このトピックに関して修士論文を書きたいと思っている私にとって、RLPからオファーをもらえたことは非常に幸運なことでした。

首都のカンパラに到着(国際会議の機会)三日間にわたって開催された RLP が主催団体のひとつである国際会議(出席する機会を得ました。この会議では、ウガンダの安定的な平和を追求することをテーマに、和解や開発、紛争のステイクホルダー分析など、幅広い視点で様々なレクチャーが行われました。まだ学部生だった2011年夏、ウガンダの元子ども兵の社会復帰支援を行っている京都にあるNGOのインターンシップ生としてウガンダ事務所を訪れたことがありました。そのころから、私がかかっているウガンダに関する知識は子ども兵が中心でした。もちろん彼らを取り巻く紛争のことも大まかには理解していましたが、この会議で取り上げられたような、より多角的な視点でウガンダの平和に関して考える必要性を理解していなかったことを痛感しました。これは、ヨークでの授業をでも、教授から口を酸っぱくして言われたことでもありました。

国際会議が終わった翌日、いよいよ私が配属される北部グルにある事務所へ移動しました。カンパラからグルへの移動は、RLPのスタッフとともに一般の長距離バスを使用しましたが、その道のりの長いこと、埃っぽいこと。2011年にも同じ道を通ったので6時間以上かかることは覚悟していましたが、途中、バスのタイヤがパンクして約1時間の修理を要したこと、また舗装工事を行っている道路が増えたためか想像よりも埃っぽくガタガタな道が増えたことが印象的でした。結局、朝8時にカンパラを出発したバスは、夕方4時過ぎにグルに到着しました。

グルで行う具体的な業務の内容については、ワークプレイズメントが始まって間もないため次回の報告書に詳細に記しますが、現在予定していることについては、以下があります。第一に、RLPのスタッフのフィールドリサーチに随行すること、第二に、修士論文のテーマである”性暴力被害を受けた男性を支援対象としたプロジェクトデザインと女性被害者を対象としたプロジェクトデザインの比較”に関する情報収集を行うこと、第三に、母校・立命館大学の先生との共同論文の基礎となる情報収集を行うことです。第一については、ヨーク大学の指導教官の助言で、性暴力被害者に直接インタビューを行うのではなく、プログラムスタッフへのインタビューや文献分析を主に行いプロジェクトデザインを比較することを通して、男性に対する性暴力と女性に対するその違いを導き出そうとするものです。第三については、男性に対する性暴力に関して幅広く情報を収集していた際、私が卒業したあと立命館大学に赴任された教授で同様のことに興味がある方が見つかり、幸運にも今回のワークプレイズメントに関して様々な助言をいただけることになりました。将来的には共同論文を書くつもりで調査を行う予定です。前回の報告書で課題に挙げていた「修士論文の骨格とリサーチクエスチョンを明確化すること」については、リサーチクエスチョンを明確化することに関しては、達成できました。

グルでは、事務所が所有している宿舎に滞在できるようお願いしていましたが、しかし、実際にグル事務所に着いてみると、連絡が届いていなかったのか、急場でベッドやカーテンの準備をしてもらうこと

に。それまでの RLP とのやりとりの過程で幾度か感じたことのひとつに、メールで連絡をしてもきちんと担当者から返事がこない、顔を合わせて直接お願いしていたことでも翌日には忘れられていたことがあります。対策として、メールの返事がなければこちらから電話をかけてメールを見てもらうようお願いする、やってもらうのを待つのではなく「あの件はどうなりましたか」とこちらから頻繁に進捗状況を確認するようになりました。常識が異なる人たちと共に働くことは、慣れないうちは時にストレスフルです。しかしこれが彼らの常識なのだとして割り切って柔軟に対応する姿勢が身に着きつつあると感じています。また、彼らと私たちの常識の違いばかりに目を向けていると、計画通りに進まなかったことばかりに目がいきがちです。そうするとますますストレスがたまり悪循環です。達成できたことに関しては存分に自分を褒め、できなかったことに関しては何を改善すればできるようになるのか、という課題に置き換えて考えることが非常に大切だと感じています。達成できたことに目を向けること、この超ポジティブシンキングとともに、これからの7週間を乗り切りたいと思います。

受入地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流

カウンセラーの David Hirst 氏の助言の元、3月3日には受け入れロータリーである The Rotary Club of Pocklington & Market Weighton にて開催された“The International Evening”にてプレゼンテーションをさせていただきました。事前に Davidさんから、戦後復興学はほとんどのロータリアンにとってなじみのない分野のため楽しみにしていること、また昨年11月末から2週間にわたって参加したボスニア研修についての話を聞きたいと聞いておりました。当日は、ボスニア研修で学んだことを主に、出身地・広島を紹介したりこれから行うウガンダでのワークプレイズメントのことなどを話したりしました。約30人の聴衆のみなさんはほとんどが以前に顔を合わせたことがある方たちで、この日までにロータリークラブの雰囲気になれるよう、様々な行事に参加させてくださった Davidさんの心遣いに深く打たれました。

授業外にて英語のプレゼンをすることは初めての体験であったため、外国人の英語に慣れていられないロータリアンのみなさんの前に立つことは非常に緊張する経験でした。みなさんつたない英語を辛抱強く聞きながら聞いてくださり、時には感嘆の声を上げながら熱心に見守ってくださいました。会の終わりには、わざわざ感想を言いに来てくださる方や、ウガンダでのワークプレイズメントについて「十分注意して行ってね。一人で無茶をしてはだめよ」と言葉をかけに来てくださる方もいました。ただただ、ロータリアンのみなさんの優しさに感銘を受けた一夜でした。

直面した課題、問題点等

前回の報告書では、ネイティブ同士が早口で意見を交わしているなかで彼らの見解を踏まえて自分の意見を言えるようになるため、事前にその内容についての知識をできるだけ多く予習しておく、ネイティブのスピードの速い英語に慣れるために、普段から友人たちにお願ひして早い英語で話してもらう、またわからないことに物怖じせず正直に質問するようになる必要があると書きました。ネイティブの速さに慣れるという点では、内容の100%を理解できるようになったわけでは



（The International Eveningでのプレゼンテーション）

おけば置いてきぼりになることはなくなりました。また、ウガンダに来て特に痛感するのが、大きな声ではっきりと発音することの重要性です。間違った英語を話している可能性を頭の片隅に置きつつも、はっきりと発話しない限り、たとえ正しい英語だったとしても相手は理解してくれないのです。

現在抱えている課題は、ワークプレイスメント中の健康維持と精神衛生の管理です。グルでは食事つきのホテルではなくベッドと机のみが置かれた事務所内にある小部屋に住んでいます。もちろんトイレや簡易な台所は事務所のものを使えますが、自炊ができるほど器具がそろっていないため基本的には三食外食です。毎食を外国人向けの高価なレストランでとる余裕はないので、地元の人が通うパン屋や屋台で済ませることが多いのです。こちらの食事は、私が慣れている食事よりも野菜が少なく肉やイモなどを多く摂る傾向があり、この生活を続けると栄養が偏ってしまうことは必須です。そのためカンパラから野菜ジュースを持ち込んだり、週に何日かは高くとも外国人向けのレストランで野菜を摂取したり、毎日日本から持ってきた栄養剤を飲んだりしています。

また、町の中心から少し外れた事務所の敷地内に住んでいると出歩くことが億劫になり、食事の手を抜いてしまうだけでなく気分転換もしにくい現状です。現在、RLPのスタッフの家族が何かと気をかけてくださり外出に誘ってくださるので、そのような機会を多く作り、気が滅入ってしまわないよう気を付けたいと思っています。町で友達を作ればよいのですが、肌の色が違う外国人で、且つ、お金を持っていると思われがちな日本人であることを彼らのまなざしから強く認識するたびに、声をかけるタイミングを失ってしまいます。

今後の課題、目標



第一に、健康に無事ワークプレイスメントを終えることがあります。前述のように、食事と気分転換が鍵です。こ

二点は、将来再びフィールドで仕事をするようになった場合にも克服しなければならない点だと自覚しています。幸運にも大学生のころインターンシップをしていたNGOの事務所がRLPの近所であり、日本人の理事とは今でも親しくさせていただいています。すでにグルでも何度かお会いし

ました。彼の長年にわたるウガンダ生活から様々なアドバ

(RLP内の自室にて。蚊帳を張ったベッド) イスをもらえることは大変に心強いものです。頼れる人には頼りながら、健康に、楽しんで過ごしたいと思っています。

第二に、納得のできる修士論文を書き上げることがあります。幸いにもRLPは大学の一組織ということもあり、アカデミックなアドバイスを受けやすい環境にあります。実際、ワークプレイスメントを始めてからすぐに上司からリサーチプロポーザルを提出するように指示がありました。私は修士論文の資料収集すなわちリサーチをするためにウガンダに来ましたので、ここにいるリサーチプロポーザルとは修士論文の土台のようなものです。恵まれた環境-ただ単に組織の補助的な仕事を割り当てられるだけでなく論文指導も受けられること-を存分に活かし、よい論文を書きたいと思っています。次の報告書の期間(6月中旬)までには、練りに練った骨子を完成させることが目標です。